
Monster Hunter 《虚影を追う者》

アカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Monster Hunter 《虚影を追う者》

【Nコード】

N0416D

【作者名】

アカ

【あらすじ】

誰も見たことのないモンスターを追うのは、一人の小さなハンターだった。

第一話：小さなハンターと怪鳥（前書き）

ちよつとオリジナル要素も含まれます。

もし何か間違っていることがあったら、よかったらお知らせください。

第一話：小さなハンターと怪鳥

酒場はハンター達で賑わっていた。

これからこなす討伐依頼に不安を隠せない者、大物を仕留めて勝利の美酒に酔いしれる者、それとは対照的に依頼をしくじってヤケ酒をかつ食らう者などなど。

煌びやかな双剣と頑丈な防具を装備した少年がいた。歳は十五、六といったところか。他のハンター達と比べると、子供が一人だけ混じっているように見えた。

少年はたくさん依頼書が貼り付けられた掲示板を腕を組みながら眺める。

やがて一枚の依頼書を手に取り、受付のカウンターに向かおうとしたところ、誰かに声をかけられた。

「よう、お前もハンターなのか？」

振り向くと、筋肉質な体をした髭面の中年男が立っていた。巨大な一振りの大剣を背負っている。

中年の男は少年を眺めた。まだあどけなさが残っている顔で、体もそれほどたくましくない。背も低くて弱々しく見える。防具を着けていなかったらまるつきり子供と間違われるではないか。

「僕に用？」

少年は冷めた口調で言った。

「いやなに、初心者かと思ってちょっとアドバイスをとでも思ったんだけどよ……」

少年は無表情で自分のことを見ている。その凍てついた瞳からはこれから挑む依頼への不安や恐怖といったものは感じられず、だからといってみなぎる闘志を感じるわけでもなく、ただとても冷静で、彼が初心者ではないことがなんとなくわかった。

「まあいいや。一体どんなクエストに行くんだ？ よかったら俺が手伝ってやるよ」

少年は依頼書を見せた。

依頼内容は、凶暴なモンスターの討伐。目標のターゲットは——イャンクック。てっきり大物を狙っているのかと思っていた中年男は拍子抜けしてしまった。

「別に助けは不必要」

それがわかったのか、少年は突き放すように一言言った。

「い、いや……せっかくだから一緒に行くぜ。まあひとつよろしく頼むぜ」

中年男は握手を求めて手を差し出したが、少年はそれを無視してさっさと受付に向かってしまった。宙にさらされた手が虚しく残された。中年男は少年の無礼な態度にめげず、何事もなかったかのように再び話しかけた。

「俺の名前はダングリオン。自分でも変な名前だと思うが、気軽にダンとでも呼んでくれ」

「……………」

少年は中年男ことダンの顔をちらと見ると、足早に酒場から出ていった。

ダンはまだで可愛げのない少年に苦笑しつつ、後に付いていった。

ダンと少年がやってきたのは草木が生い茂る密林。

視界を遮る植物達が鬱陶しく、時たま現れる巨大な昆虫も非常に厄介だ。

しかし少年はそれらの障害をもともせず、どんどん奥に進む。

ダンはそのなりに熟練したハンターなのだが、それでも少年に付いていくだけで精一杯だった。

「おい……もう少しゆっくり行かねえか？　ちよつと速すぎるぜ……」

「強走薬でも飲めばいい」

少年の冷静なツツコミにダンは一瞬戸惑ったが、そんなことのためにいちいち強走薬なんか使っていられない。というか、大剣を扱

うダンは強走薬を使う機会はありませんので、ポーチに入れてすらいなかった。

ところでダンは少年の名前を知らない。さっきから何度か話しかけてはいるのだが、ちっとも自己紹介をしてくれないのだ。

しつこく話しかけ続けていると、ようやく観念したのかため息をつきながら口を開いた。

「エリス」

「エリス……そうかエリスか！」

やっと話してくれた！　　ダンは嬉しくなっつてつい豪快に笑ってしまった。

「でもなんだか女みたいな名前だな！」

「……………」

妙な沈黙。

歩みも止まってしまった。　　たまらずダンが口を開く。

「あのよ……、まさかお前、実は可愛い女の子だったりする……のか？」

「……………」

エリスは無言のまま再び歩き出した。

図星だからこの話をしたくないのか、それともやっぱり男で勘違いされたのに腹を立てているのか、いまいちよくわからない。

ただとりあえず、これだけは言っておいた。

「お、俺が悪かった！　　機嫌を直してくれ！」

何が悪かったのか、それすらよくわからないけれど。

「しっかしよく、見つからねえなあ」

密林をある程度探し回ったがイヤンクツクの姿を確認することはできず、エリスとダンは一旦休憩をすることにした。

適当に安全な所で腰を下ろし、こんがりと焼きたての肉を頬張るダン。よっぽど腹がへっていたのか、あっという間に二つほど食べ尽くした。

「で、お前は休憩時間も有効に使おうとするんだな」

ダンとは半ば感心しながら言った。

エリスは双眼鏡を片手に携帯食料をかじっていた。少しでも早くイランクックを見つけたいということなのだろう。

肉を食べ終わったダンを見ると、残っていた食料を一気に食べきり双眼鏡をしまった。そして早く行こうと言いたいのか、親指で道を指し示した。

「お前さ、そんなに動き回って疲れないの？」

「別に」

エリスはそれだけ言うのと、さっさと先に進んでしまった。

ところで、エリスが男なのか女なのかはうやむやにされたままである。

どっちだろうと別に構わないのだが、中途半端にその話題に触れないでいると余計に気になるもの。思い切って聞いてみたいが、今までの言動からすると無視されるであろうことうけあい。

エリスからしたら放っておいてほしいのかもしれないが、気になるものは気になるのだ。聞いてみたっていいじゃないか。

「で、どっちなんだ？」

「……？」

いきなり変な切り出し方をしたので、エリスに訳がわからないといった顔で見られた。

「ああえっと、お前が男か女なのかってことだ。さっきからメチャクチャ気になって気になってしょうがないんだ」

「……………」

やっぱり無視だ。

しかし今回は引き下がらない。これだけは気になるから知りたいのだ。このまま知らされずにいたら、夜も気になって眠れないに違いない。

「教えてくれたっていいだろう？　ちなみに俺は男だ」

そんなことはわかりきっている。その少しいかつい髭面で女性だ

ったら犯罪だ。

ダンがあまりにも必死に聞いてくるので、エリスはやれやれとため息をつきながら口を開いた。

「女」

「お、女……かぁ」

結局エリスは男じゃなかった。

そりゃあ男のわりには綺麗な顔立ちをしているなと思ったし、背も低い。それを考えたら女だと言われて、ああ納得。

でも防具を身に付けていて一人称が“僕”だ。男と間違っても仕方ないだろう。

「満足？」

「あつ、ああ。教えてくれてありがとうよ」

「別に」

ただ、やっぱり可愛げがない。

木々の間から溢れる木漏れ日。

その木漏れ日を遮るかのように、それは空をさまよっていた。

「やっと見つけた。イヤンクックだ！」

桃色の身体、大きなクチバシに耳。あれは間違いなくイヤンクックだ。やっと姿を現した。ダンは逃がしてなるものと角笛を取り出し、大きく息を吸い込み思い切り吹いた。

イヤンクックはこちらの存在に気付き、二人に向かって勢いよく滑空してきた。

エリスとダンは攻撃をかわし、それぞれの武器に手をかけ身構えた。

「また違う……」

エリスは小さく呟くと、ポーチから音爆弾を取り出し、イヤンクックに向かって投げつけた。

——キイイインッ！

耳がつんざくような高音が辺りに響き渡った。聴覚の良いイヤン

クックにとってこの音は気絶してしまいそうなほど強烈で、その影響で頭をクラクラさせた。

「あとは僕がやる。邪魔しないで」

「なんだって？　せっかく手伝ってあげてるんだから、そんなこと言うなよ」

エリスはダンを睨み、「別に助けは不必要、僕はそう言った筈だけど？」そう言うのと双剣を構え、勢い良く駆け出した。

意識が朦朧もうろうとしているイヤンクックの下に潜り込み、乱舞攻撃を足に放った。

両手の剣から繰り出される無数の斬撃。それに耐えられず、イヤンクックは地面に崩れ落ちた。

チャンスとばかりに今度は顔面に向かって乱舞攻撃を放つ。

一撃、二撃、三撃……素早い斬撃に目が追いつかない。

そしてトドメとして両手を振り上げ――一気に叩き込んだ。

イヤンクックは脳天から血を噴き出し、断末魔をあげながら動かなくなった。

「討伐完了。だけど……」

エリスは刃に付いた血を拭き取り、町に戻ろうとした。

ダンはその様子を黙って見ていた。いや、何もできなかったただけだ。

仮にも飛竜種の相手を出会ってからたったの数秒で始末するなんて、並みのハンターじゃできないことだ。それなりの腕を持つダンですら数分はかかる。

目の前にいる少女は、もしかしたらすごく凄腕のハンターなのではないだろうか。

「お、おい！　お前は一体……？」

「……………」

エリスは何も答えず、町へと帰った。

町に帰ってきた時にはすっかり陽が沈んでいた。

エリスとダンは依頼の報酬を受け取った。イヤンクックの討伐依

頼だったので、金額はあまり多くない。

「なあエリス、よかったら少し飲まないか？ 俺が奢ってやるよ」

ダン は 依 頼 が 終 わ っ た 後 に 酒 を 飲 む の が 好 き だ っ た 。 疲 れ た 体 に 酒 が 染 み 渡 り 、 「 今 日 は 頑 張 っ た 。 明 日 も 頑 張 ろ う 」 と い う 気 持 ち に な る ら し い 。

しかしエリスは帰り支度を始めた。付き合う気はないようだ。

「いろいろ話したいこともあったんだが……まあいいや。じゃあな、また会えるといいー」

「ダングリさーん！」

突然若い女の声が聞こえた。

「やっぱりダングリさんだ！ こんな所で奇遇ですね」

「なんだ、リザか」

リザと呼ばれた女はニコニコと笑いながらダンに手を振った。

見た感じ二十歳あたりだろうか、大人な顔立ちをしている。しかし仕草がなんとなく子供っぽい。

全身ピンク色の防具で身を包んでいた。フルフルと呼ばれる飛竜の皮を使用して作られたものだ。彼女もハンターなのだろう。

リザは横で帰り支度をしているエリスを見ると、「知り合いですか？」とダンに聞いた。

「今日一緒に狩猟しただけの仲だ」

「ふうん……」

リザはエリスの顔を覗き込んだ。エリスは顔をそむけた。

「あなたみたいな女の子でもハンターが務まるんですね、スゴい！」

決して嫌味を言っているのではなく、素直に感心しているのだ。しかしエリスは特に何も反応しなかった。

「お前……よくこいつが女の子だってわかったな」とダン。

「いや、だって見るからに女の子じゃないですか。もしかしてダングリさん、このコのことを男の子だと思っていたんですか？ それはこのコに対して失礼ですよ」

ダンは申し訳なさそうな顔をした。

帰り支度を終えたエリスは、さっさとその場から立ち去った。

「ところでダングリさん、明日……いや、明後日一緒に狩猟しませんか？」

「別に構わないが、何を狩りに行くんだ？」

「白いアイツです」

「白いアイツ、ね……。電撃ビリビリのアイツか？」

「はい。電撃ビリビリの白くてグギャアアって鳴くアイツです」

「お前さ、毎回毎回思うんだけど、なんで名前で呼んでやらないんだ？」

「あたしなりのこだわりです」

ちなみにイヤンクツクのことは『鳥さん』と呼ぶらしい。

「ところでリザ、これから一杯飲もうかと思っているんだが、付き合ってくれないか？」

「イヤですよ。あたしは早く寝たいんですから。クライスでも誘えばいいでしょう？」

クライスとは二人の仲間のことだ。今この場にはいないが、ガンナーをやっている男のハンターで、中年のダンと違って年齢は二十歳になったばかりと若い。でも酒好きだとか。

「じゃあそうするわ。じゃあなりず、また明後日な」

「はい、さようなら」

第二話：襲撃と白いアイツ

——翌日。

今日も朝から良い天気だ。つついこちからも良い気分になって、歌を口ずさんでしまう。

そんな風に明るく行動するのはエリス……ではなく、白いシャツにスカート姿という私服を着たりザだった。長い髪を後ろに束ね、いわゆるポニーテールのような髪型にしている。人々はこれをガウシカテールと呼ぶ。

この日ダンとの狩猟を明日に控えたりザは、今日はゆっくり買い物でもしようと思い町へと繰り出していた。

たまには体を休めるのもいいことである。

「あつ、砥石が安い！ すいません、これ五つほどください」

狩猟に使う道具はもちろん衣服やアクセサリといった物にも目を通す。欲しい物がたくさんあって、とても良い買い物をした。

両手で荷物を抱えながら歩いていると鍛冶屋の前までやって来た。

「そういえば頼んでいた物……完成したかな？」

鍛冶屋に入ると、眼鏡をかけた優男といった感じの男が迎えてくれた。彼がこの鍛冶屋を営んでいる者だ。

「やありザ、今日は私服姿だね。もしかしてアレが目的かい？」

「ただ近くに来たから寄ってみただけなんですけど、もしかして既に完成しているんですか？」

「いや、アレはまだ改造途中でね……。完成はまだまだかな」

「そうですか。じゃあ気長に待ちます」

ふと横を見ると、頑丈そうな防具に身を包んだ背の低いハンターがいた。

リザはこのハンターに見覚えがあった。たしか昨日ダンと一緒にいた女の子だ。

「こんにちは。昨日会ったんだけど覚えてる？」

リザは明るく話しかけてみたが、女の子はリザの顔を見ただけだった。

「あたしはリザ。あなたのお名前は？」

女の子はしばらく考えた後、「エリス」とだけ答えた。

「エリスちゃんね。うん、よろしく！」

「……………」

エリスはダンの時と同じく、特に反応を示さなかった。

しかしそんなことはお構いなしに話し続ける。

「エリスちゃんって双剣を使うんだね。刃が光っていて綺麗。見たことのない武器だけど、なんていう名前？ それにしてもエリスちゃんってよく見ると可愛い顔だね。あまり顔を覆わない頭防具でも着けてみたらどうかな？」

リザは一方的に、しかも早口で喋り続けた。相手が年下だからなのか敬語はあまり使わない。あまりのマシंगाントークにエリスはぽかんとした表情で立ち尽くしてしまった。

「ダングリさんとはどういった感じで出会ったの？ あの人見た目はすごくオジサンって感じだけど、とっても良い人だよ。あたし、明日ダングリさんと一緒に白いアイツの狩猟に行くんだ」

「……………えっ？」

リザの「白いアイツ」という言葉にエリスは敏感に反応した。

——その時、誰かの叫び声が聞こえた。

「町の中にモンスターが入ってきたぞー！」

途端に町中がざわめき始めた。

エリスは双剣を持ち急いで外に出た。

「あたしの荷物、ちょっと見ていてください！ あと武器借ります！」

そう言うとりザは壁にかけられたガンランスを手に取り、エリスの後を追いかけた。

町を襲撃したのはランポス達の群れだった。

既に町のあちこちでは他のハンター達による迎撃が行われている。
「なんで突然こんなにたくさんランポスが来たんだろう？」

「さあ」

走りながら問うリザに対してエリスは正直に答えた。

そして珍しくエリスの方から口を開いた。

「ドスランポス」

しかしあまりに雑過ぎた内容なため、何を伝えたいのかわからない。

「ドスランポスがどうかしたの？」

「ランポス達をまとめているのかも」

そこまで言うと、エリスの言いたいことがなんとなくわかった。

「つまり、ドスランポスを探して退治すればランポス達は引き返してくれるんじゃないかっていうこと？」

エリスは建物の中から急に飛び出してきたランポスを剣で切り捨てながら頷いた。

「たしかに全部のランポスを相手にするわけにはっと、いけないものね！」

リザはランポスの攻撃を巨大な盾で受け止め、ガンランスによる砲撃で吹き飛ばした。

今は防具を一切着ていない状態なので、少しでも攻撃を食らうと致命傷になりかねない。だから頑丈な防御が可能なガンランスを選んできたのだが、実はあまり扱いに慣れていないため思うように戦えてなかった。

本来はハンマーを好んで使っているのだが、すべての攻撃を回避できる自信がなかったための苦渋の選択だった。

「ドスランポスを探すのはいいけど、手当たり次第に探すわけにはいかないよ。どうする、手分けして探す？」

エリスは首を横に振り、ポーチから薬を取り出した。

「なるほど、千里眼の薬ね」

使用者の第六感を研ぎ澄まし、相手の居場所を掴むことができる

薬。しかし時間は限られている。 エリスは千里眼の薬を一気に飲み干し、少し辺りを見渡す。

「こっち」

エリスは路地に路地に向かって走り出した。リザもその後について行く。

今度は路地裏に入り、そして大通りに出て、また路地に入り、今度は広場に出て……。二人は町を行ったり来たりした。

「エリスちゃん、さっきからウロウロしているけど、ちゃんと居場所を把握しているの？」

「相手もあちこち移動している。場所が特定できない」

今度はハシゴを使って民家の屋根に登りだした。

「エリスちゃん、まさかドスランポスは屋根の上にいるって言うの？」

エリスは首を横に振り、「先回り」とだけ答えて素早く屋根に登った。

屋根の上を伝い、別の民家の屋根へと飛び移る。そしてまた別の屋根へ、また次の屋根へと二人は移動し続けた。

「いた」

見下ろすと、通りの中央に一頭だけ他のランポスとは違う大きなものがいた。トサカが赤く、爪も大きい。ドスランポスだ。

「よし、どこか降りられる所を探そう」

しかしエリスは屋根から飛び降りた。高さは建物三階分ほどである。そこからなんの躊躇いもなくジャンプ、である。着地に失敗したら怪我は免れない。

「ちよっ、エリスちゃん！」

気が早まったのかと思いいリザは驚愕した。

だが、エリスは無事に着地していた。ちょうど着地した所には牧草が山積みになっていたため、それをクッション代わりにしたのだ。リザもエリスに続いて飛び降りる……。ことができなかった。なにせ高いから妙な恐怖を感じてしまい、失敗したらどうしようと考え

てしまうのだ。

とりあえずリザは安全のために、建物の中に入り階段を使ってエリスの所に向かったのだった。

そしてたどり着いた時には、既にドスランポスは無惨にも双剣で斬られまった後で、ピクリとも動かなくなっていたのであった。

「乾杯ー！」

リザと酒の入ったグラスを、エリスはティーの入ったカップを掲げた。

ドスランポスを仕留めランポス達の大半は町から逃げていった。しかし一部の残党がまだ残っていた。二人はそれも始末してギルドから特別な報酬を貰い、そのお金で酒場に飲みに来た。

だが「一緒に飲もう」と言って大人しく付き合うエリスじゃない。いつも通り無言で立ち去ろうとしたが、リザに無理矢理引っ張られて付き合わされることになったのだった。

「エリスちゃんって強いよね。あたしよりずっと年下なのに、腕前は絶対に上だね。もしかして天才？」

リザは一方的に喋りまくるが、エリスは特に返答しない。

「そういえばさ、おやすみベアって知ってる？　クマのぬいぐるみなんだけど、あれ可愛いから好きなの」

「たしかに可愛い」

なんとエリスが返してくれた。

するとリザの表情がパアッと明るくなり、

「そうだね、そうだね！」と嬉しそうにエリスの手を掴んで上下に揺さぶった。

「可愛いよね、あたしはニャーニャー言うアイルーより可愛いと思う！　性能は良くないけどね！　だからあたし、もっと実用化をさせようと思っているんだけど……」

「……………」

エリスは聞きたいことがあったから会話をより良く繋げるために

口を開いたのだが、それがリザのマシニングトクに火を着けてしまい、こちらから話題を振る隙がなくなってしまった。

「あの……」

「そういえばね、あたしの仲間にクライスっていうガンナーがいるんだけど、この前ランゴスタを撃っていたら、奥にいたダングリさんに弾が命中したの。あの時のダングリさんの悲鳴にはつい笑いちゃった。『うげー』って言ってたのよ『うげー』って！　ぷぷっ、今思い出しても笑える……！」

「……………」

とうとうリザは一人で腹を抱えて笑い出してしまった。

エリスはどうしようもなく途方に暮れ、仕方なくリザの話に付き合ってやることにした。

「あとね、ゲロスを狩りにいく時……あつ、ゲロスっていうのはあたしがゲリヨスと呼ぶ時のニックネーム的なものなんだけど、クライスの奴がさ……」

「……………」

「特産キノコキムチって美味しいよね。あたしアレのためだけにキノコを採りに行く時があるよ」

「……………」

「それからさ——」

リザの話は夜まで続いた。

——気が付くと、リザは見知らぬ場所で眠っていた。

自分はいっ瞬眠ってしまったのだろうか？　エリスと酒場に行って、酒を飲んで、良い気分になりながらひたすら喋って……。

そこからの記憶がない。

リザは体を起こした。

うん？　ここは見知らぬ部屋のベッドの上だ。もしかして誰かの家？

部屋を見渡す。

部屋はあまり大きくなくて、壁には様々な剣やランスがかけられており、さらにイャンクックが描かれた絵が飾ってあった。

しかもただのイャンクックではない。白くて、体全体に青い雷を帯びており、普通のと比べて耳が長い。

「起きた？」

水の入ったグラスを持ったエリスが部屋に入ってきた。どうやらここはエリスの家らしい。

エリスはずいぶんとゆったりした部屋着を着ていた。髪の毛はボブヘア。こうして見ると、どう見ても普通の女の子にしか見えな

い。

「えっと、どうしてあたしはここにいるの？」

「酔いつぶれた」

それだけ言うと言を差し出した。リザは水を受け取るとそれを一口含んで飲み込んだ。

「泊まっていいから」

「ふえっ？」

「おやすみなさい」

エリスはさっさと部屋を出ていった。

いろいろと突然で頭の中が整理できないが、とりあえず気持ちを落ち着かせる。

つまり自分は酒に酔って眠ってしまい、エリスの家に連れて来られ、宿泊を許可されたということだ。

エリスって態度に似合わず意外と優しい子なんだなあと、リザはなんだか嬉しくなった。

それならありがたく泊まらせてもらおう。

リザは布団にくるまり、ゆっくりとまどろんでいった。

朝、エリスがリザを起こしにやってきた。

リザはベッドから落っこちていたが、それでも気持ち良さそうにすやすやと静かな寝息を立てていた。

リザを揺さぶると、

「うゝん」と目をこすりながら起きてくれた。

「あ、エリスちゃん。もう朝？」

エリスはこくと頷いた。

「ご飯食べていく？」

「えっ……？ エリスちゃん、朝ご飯まで作ってくれたの？」

エリスは再び頷いた。

「ごちそうさまでした！」

リザはエリスが作ったという朝食を食べた。わりと美味しくて三杯もお代わりしてしまった。

「エリスちゃんって才色兼備だね」

「別に」

エリスのテンションは相変わらずだ。

「ところでエリスちゃん、あの部屋にあった白いイヤンクツクの絵なんだけど……」

「白怪鳥……」

「白怪鳥？ うん、まあなんでもいいんだけど、あれって本当にいるの？」

「いる」

エリスは即答した。

「あたしは見たことも聞いたこともないけど？」

「でもいる。お父さんが見たから」

「お父さん？」

「僕のお父さん、今は絵描きだけど昔はハンターをしてた」

「そのお父さんが白怪鳥を見たって言うの？」

「そう、あの白怪鳥の絵はお父さんが描いたもの。僕はあの白怪鳥を探している」

なんだか今日のエリスはよく喋る。

「昨日言ってた白いアイツって、白怪鳥のこと？」

「白いアイツ？」

「鍛冶屋で言ってた、今日狩猟に行くっていう相手のこと。もし白怪鳥なら僕も連れて行ってほしい」

リザは「うーん」と唸ったあと、申し訳なさそうに頭を下げた。

「エリスちゃんには紛らわしい言い方だったけど、白いアイツってフルフルのことを言ってたのよ。だから白怪鳥じゃないの、ごめんね」

「……別に」

エリスは「やっぱりそんなことだろうと思ったから」と気にしていないような素振りを見せたが、きつと内心は残念な気持ちでいっぱいに違いない。

「あのさ、白いアイツ……フルフルでいいならあたし達と一緒に狩猟しに行かない？　もしかしたら白怪鳥も現れるかもしれないし……」

「いい。自分で探す」

エリスは立ち上がり、朝食の片付けに取りかかった。

第三話…エリスと青年ハンター

今さらだが、このはエステイトと呼ばれる大きな港町だ。巨大な大陸の海に面した船での貿易が盛んな町である。それゆえに珍しい品物など入ってくるが多く、それを目的にハンターが集まる。

エリスもそんな目的を元にやって来た一人のハンターである。それ以上に、これだけ人がいるのだから白怪鳥の情報の一つぐらい耳に入るだろうと思ったからでもある。

それにしても今日もよく晴れた気持ちの良い日だ。ぽかぽか陽気、吹き付ける潮風がとても心地良くて、寝転がったらそのまま眠ってしまいそうだ。

せっかくの良い天気なのだから綺麗な海でも眺めながらランチにしようと思い、店でご飯を買った。パンにソーセージをサンドしたものと、ヨーグルトにフルーツのジャムを混ぜたものを選んだ。

適当に海を眺めやすそうな所を探し、ちょうどいい高さの段差に腰掛けてご飯を食べる。広大な大自然の前で食べるご飯は格別に美味しかった。

ふと、あることに気付いた。

飲み物を買うのを忘れていた。

パンを食べると無性に喉が渇くエリスにとって飲み物がないというのは、暑い所へ行くのにクーラードリンクを用意し忘れるぐらいに辛いものだった。

ヨーグルトをドリンクのように飲み干すが、そんなものでは大して喉の渇きを満たすことはできず、甘酸っぱい味が口の中に広がるだけだった。

集会所へやって来た。

今日も白いイランククッキー——白怪鳥を見つけるために、依頼の内容が書かれた紙が貼ってある掲示板に目を通す。

本当は依頼なんか受けず、気ままに旅をしながら世界中を歩き回って探したほうが見つかりやすいのだろうが、何分旅の資金が集まっていないので、今は少しずつお金を貯めるしかなかった。

とりあえず今は白怪鳥よりも、旅に出るための資金集めが優先だ。だからといって白怪鳥探しを放置したくもないのでイヤンクックの依頼を受けている。

そのため金回りはあまり良くない。

「キミ、初心者？」

突然背後から声をかけられた。

振り返ると、紫色のトゲトゲした黒狼鳥と呼ばれるものの素材を使用して作られた防具を身に付けた若い男がいた。黒の髪に少し茶色のゲネポスショートという髪型で、サファイアのような綺麗で透き通った青い瞳、少々つり目。しかしキツい印象はまったくなく、むしろ優しそうなお兄さんといった雰囲気がある。

エリスは背が低くて子供っぽいので（実際年齢的にはまだまだ子供だが）よく初心者に間違われてしまうのに毎回頭を悩ませていた。小さなハンターの小さな悩みだ。厚底の靴でも履いてみようかと一時期真剣に考えたこともある。

今日は頭に防具を着けず黄色いピアスで済ませてあるから幼い顔がばっちり見える。実は重い装備はあまり好きじゃないから簡単に済ませてみたのだが、これも初心者に見られる原因の一つか。

「あつ、もしかして初心者じゃない……とか？　そ、そんなに睨まないでよ、オレが悪かったから許して」

別に怒ってなどいない。しかし無表情な顔がそういう風に思わせてしまうのだろう。まあ、多少はムツとしたけれども。

「あれっ？　背が低くて双剣を持った子供のようなハンターって、どこかで聞いたことがあるような……」

あいにくだが、こちらは相手のことを知らない。

青年は腕を組みながら考え、ようやく思い出したらしく手をポンと叩いた。

「思い出した。キミはたしか……白怪鳥とやらを探しているハンターだね？」

青年は自分のことを知っていた。

「話には聞いていたんだ、キミのようなハンターが白いイヤンクツクを探しているって。一部のハンター達の間で話題になっていたよ。たしかキミのことを『虚影を追う者』って呼んでたな」

有りもしないものを追いかけている、ということでもそう名付けられたのだろう。明らかに嫌味的な要素が含まれていて不愉快な名だ。だが、そんなことよりもだ。

「僕に何か用があるんじゃないの？」

「あっ、そうだった。ごめんごめん、つい……」

青年はあははと笑いながら頬を指で掻いた。

「キミが初心者だったら、一緒にドスゲネポスの討伐依頼をやってくれないかなあって思ったんだけど、やっぱりやめておくよ。キミが『虚影を追う者』だったら、オレは足手まといになるだけだ。キミは相当強いと聞いているからね」

「僕はエリスだ。虚影なんて追っていない」

「うん、白い怪鳥……見つかるといいね。オレも陰ながら応援するから。頑張れよ！」

青年は爽やかな笑顔で握手を求めてきた。が、エリスはそれをいつものように無視した。

「……まあ、別にいいけど。オレはクライス、また会うことがあったら、その時はよろしく」

「クライス……？」

聞いたことある名だが、いまいち思い出せない。最近耳にしたことがあった筈なのだが……。

そしてクライスと別れた後にようやく思い出した。

……そういえばクライスって、リザの話の中で出てきた名前だ。しかし別にどうでもよかったので、あまり気にしないでおいた。

第四話…父と母

今朝も相変わらずの良い天気だ。窓の隙間から入り込む光に顔が照らされ、エリスは目を擦りながら寢床から這い出る。

まだ眠気が覚めないで、家の外に出てすぐ側にある井戸から水を汲む。

両手いっぱいにつき通った水をすくい、それを勢いよく顔に浴びせた。細かな水しぶきが辺りに飛び散り、乾いた地面を湿らせた。

再び家の中に入り、今度は朝食の支度を始める。

見た目はまだまだ子供なエリスだが、そんなことをまったく感じさせない手際の良い動きで作業を進める。

普通ならアイルーを雇って料理を作らせたりするが、エリスの家には一匹もいなかった。

アイルーを雇わない理由の一つはお金がかかるから、ということ。今は旅の資金などを貯めているので、余計なお金はあまり使いたくないのだ。

だが生活が楽になるということを考えると、一匹だけでも雇ったほうがいいんじゃないかと思い、色々悩んでいたりする。

作ったのはオレンジ色をしたパン。とりあえず今食べる分と、昼に食べる分を作ってみた。

なんでパンがオレンジ色をしているのかというと、材料にニンジンを使っているからだ。要するにニンジンパン。

これは亡き母がよく作ってくれた料理だ。

エリスは小さい頃ニンジンが嫌いだった。それを見た母はパンの生地ですりおろしたニンジンを練り込み、ふっくらと見事なパンを焼き上げた。

「これで少しはニンジン嫌いが治るといいね」なんて言われ、恐る恐る一口食べてみると、なかなか意外と美味しいものであった。

母のおかげでニンジン嫌いが治った。

そして今、こうして懐かしの味を堪能している。

一回一回噛み締めるごとに母の優しい笑顔が思い出される。

母もハンターをやっていて、ほとんどの日は家で幼いエリスの面倒を見ていたが、たまに父と一緒にクエストを受けたりしていた。

ある日、母は「リオレウスの討伐に行ってくる」と言っただけで帰ってこなくなった。

どうして母は帰ってこないんだ、と父に聞いたところ、相手はなかなか凶暴な奴で、苦戦を強いられた挙げ句そのまま――

そして父は絵描きになり、小さなエリスはハンターを目指すようになった。

その時は母の仇を取るとか白怪鳥の詳細を暴くためではなく、両親が歩んだ『ハンター』という道を自分も辿ってみたいと思ったからだ。

でもやっぱり母の死というのは幼いエリスにとって衝撃的なものであった。おかげでその事実を聞かされてから口数は減り、必要最低限のことしか喋れなくなってしまった。

さらに父が描いた白怪鳥の絵。周りの人々から

「こんなモンスターはいない」、

「ありえない」などと嘘つき呼ばわりされ、それに加え

「お前の父親は嘘つきだ」と近所の友達にまで言われ心が閉口してしまった。

なんだか辛い過去も思い出してしまい、気分が少し滅入ってしまった。頬をパンパンと叩き、気合いを入れ直す。

狩猟用の防具を身に付け、壁にかけられた二つの剣を見つめる。

ハイツインダガーと呼ばれるこの剣は、ハンターだった母が使っていた形見の武器。柄を握ると、母の温もりを感じたような気がした。

「お母さん、お父さん、行ってきます……」

エリスは今日も、足早に集会所を目指した。

第五話…ランポスの群れと少女ハンター

エリスは森の中を歩き回っていた。今日はイヤンクックを探すためではなく、別の目的で来ていた。

この間ランポスの群れが町を襲撃するという事件があった。ギルドが事態を詳しく調査すると、最近森や丘のランポス達が異様なまでの繁殖をしているということがわかった。そこでギルドはハンター達を頼りにした。多くのランポスを討伐し元の環境に戻るよう協力をしてほしい、と。

エリスへの依頼内容は、『とにかく多くのランポスを討伐すること。しかしあまり数を減らしてはいけない』というものだった。

——その時だった。茂みの中から一頭のランポスが飛び出した。ランポスの鋭い爪がこちらに向かってくる。エリスは身を翻して回避したが、爪は若干肩をかすめ、小さな切り傷を付けた。

すぐに二振りの剣——ハイツインダガーを構え、ランポスに斬りかかる。まずは右手からの振り下ろし。これは外れた。しかし振り下ろした勢いを緩めることなく、体をそのまま風車のように回転させて左手の剣で斬りつけた。今度は当たった。ランポスは頭頂部から肩のあたりにかけて深い傷を負った。

ランポスの傷口から血が噴出し、エリスは返り血を浴びた。だが攻撃の手を休めようとはしない。今度はその傷に、剣の根元まで突き刺した。ランポスが悲痛な叫びをあげるが、エリスは構わず剣に力を込め肉を引き裂いた。ランポスの断末魔と共に胴と首は二つに分かれた。

「六頭目……」

エリスは周りが安全なことを確認するとその場に座り、持ってきた水筒の水を口に含んだ。

——ランポスの異様なまでの繁殖。今まではこんなことはなかった。

このまま事態が解決しないでいると、この大自然はどうなってしまうのだろうか。何か良からぬことが起こりそうな気がする。

白いイヤンクック……。もしかたらこの乱れた自然の調和と何か関係があるのかもしれない。それとも……。

「――あれっ、そこにいるのはエリスちゃんじゃない？」

女の声がした。振り向くとそこにいたのは、全身に桃色の防具を身に着け、巨大な熊のぬいぐるみを背負った女ハンターのリザだった。

それとボウガンを担ぎ、黒狼鳥の防具を着けた青年も一緒にいた。あれはたしか、リザの仲間でクライスという名前のハンターだ。

リザはエリスの姿を確認すると、嬉しそうに飛び跳ねながら近寄ってきた。

「もしかしてエリスちゃんもランポス退治？」

エリスは黙って頷いた。

「あたしとクライスもそうなの。またこの前みたいなことになったらイヤだからね、あたしも少しはみんなのために頑張らないといけないなと思ったわけ。ね、クライス？」

「そんなこと言って、本当はその熊を振り回したくてうずうずしてただけでしょう」

「ま、まあそれもあるけどね、今言ったことは本当よ？」

リザの持つぬいぐるみは一般的に『おやすみベア』と呼ばれるハンターの武器に似ていたが、なにかが違っていた。目つきが鋭く牙をむき出していて、見るからに凶暴な熊だった。

リザが言うには、このぬいぐるみは鍛冶屋に無理を言って頼んだ特注品らしく、『おやすみグリーズリー』と名付けられた武器だとか。いろいろと実用的で使いやすいように改良を施したらしい。

「エリスちゃんは何頭やつつけた？ あたし達は今五頭」

「六頭」

「さっすがエリスちゃんね、スゴイ！ でもあたし達はそろそろ引き上げようと思ってるの。まだ他にも大勢のハンターが同じことを

しているから、あまりやりすぎると逆に数が減りすぎて困ると思うのよね」

「それを言ったのはオレですけどね」

リザはクライスを軽くどついた。

「ま、エリスちゃんは強いから心配ないだろうけど、まだいるつもりなら気をつけてね」

「『虚影を追う者』といえど、群れをなしたランポスに突っ込むの危険だからな」

エリスは一瞬だけクライスを睨むと、「気遣い不要」とだけ言いその場からさっさと立ち去った。

エリスは森の奥までやって来た。

ふと足元に目をやると、大きなランポスの足跡があることに気付いた。

——ドスランポスだ。それも複数。

エリスはさらに奥へ進むことにした。なるべく足音をたてないよう慎重に突き進む。

やがて開けた場所に着いた。エリスは適当な木に身を潜めながら辺りの様子を探る。

ドスランポスは少し離れた所にいた。数は三頭、それでいてかなり大きな体の持ち主だった。

エリスはドスランポス達の爪や周りが紅く染まっていることに気付いた。そして、何かを囲うようにし、その何かに注目していた。

それは、血を流し倒れる一人のハンターだった。

エリスは咄嗟に荷物の中から煙玉を取り出し、ドスランポス達に向かって投げつけた。濃い煙がすぐに吹き出されて辺りは真っ白になり、視界が悪くなった。

突然のことにドスランポス達は混乱した。エリスはその隙を見計らい血塗れのハンターを背負ってそこから離れた。

ある程度安全な所まで逃げ切ると、すぐに応急処置に入った。そのハンターはあまり頑丈な防具を身に付けていなかったが、幸いなことに傷はそれほど深くなく、命に別状はないようだった。応急処置の際、ハンターが被っていた頭防具を外させてもらったところ、なんと自分と歳がそう離れていない感じの少女だった。様子を見守っていると少女が目を覚ました。最初訳がわからないといった感じで周りを見渡し、エリスの存在に気がついた。

「あ、あの……貴女は？　そして私は一体どうしてここに……」
エリスは彼女がドスランポスに囲まれて倒れていたことを教えた。「そうだ、私もランポス退治にきていて、それでドスランポスがいたから追いかけて、そしたら他のドスランポス達が待ち伏せしていて、そのまま一斉に……」

少女はドスランポスの群れに襲われたことを思い出し、悲鳴をあげた。その時のことが深く記憶に残されていたようで、全身をがたがたと震わせた。

エリスは早く彼女が安心できるように「もう大丈夫」と呟いた。小さな声だが、子供をあやすように何度も何度も呟いた。

やがて彼女は落ち着きを取り戻した。傷だらけの体を起こし、エリスに礼を述べた。

「私はティアナ。あの……助けてくれてありがとう、えっと……？」
「エリス」

「エリス……さん。本当にありがとう……」
ティアナという少女は深くお辞儀をした。
「歩ける？」

「あ、はい、たぶん、なんとか……」
エリスは自分の肩に掴まるようティアナに支持し、彼女を支えゆつくりと歩き出した。

「私、まだまだ新米のハンターでして、それなのにこの依頼を受けたのは、この前町にランポスの群れが来た時、他のハンターが町の

皆さんを守るために戦っていたのに私は怖くて建物に隠れていて……。ハンターなのに戦うことを恐れたことが悔しくて、それで今度は逃げないでちゃんと戦うぞ、って思っていたんですが……」

そこまで言うと、ティアナは深く息を吐いた。

「また戦うのが怖くなっちゃいました。ダメですね、私。強くてみんなを守る格好いいハンターに憧れてこの世界に入ったのに……」
「それで？」

「私にはハンターなんて仕事、無理だったのかな……」

ティアナはどうとう泣き出してしまった。自分の無力さが本当に悔しくて、それを克服するために頑張ったのにどうにもならなくて、どうしようもなく、堪えていたものが一気に吹き出したのだ。

エリスは何も言わずティアナの頭を撫でてやった。それでもティアナは泣き止むことはなかった。

何故この少女に優しくしてやろうと思ったのかはわからない。こんな自分の柄ではないと、そうも思った。

夕日が沈みかける時間になっていた。二人は黄金色に輝く丘の上でじっと立ち尽くしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0416d/>

Monster Hunter 《虚影を追う者》

2010年10月10日02時38分発行